

三遊亭圓朝と圓通堂（下）

二村文人

富山大学人文学部紀要第54号抜刷  
2011年2月

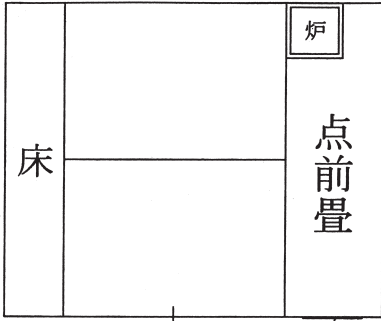
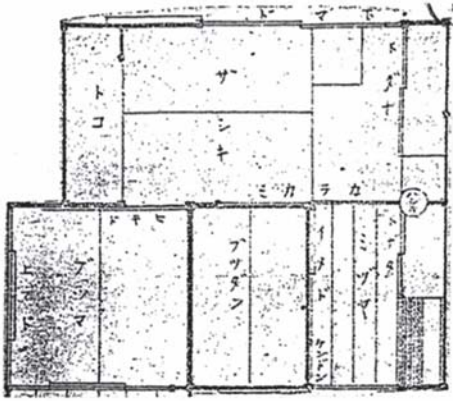
## 三遊亭圓朝と圓通堂（下）

二村 文人

### 四 茶室としての圓通堂

圓朝が新宿の家を購入したとき、既に圓通堂の建物があったのかどうかは判然としない。また、圓通堂の三畳の書齋は、小泉策太郎の所有になってからは茶室の体裁が整えられているが、圓朝が茶室に使用したのかどうかもわからない。新宿の住居には、別に茶室があった（図11）。以下、石塚修氏の教示によるところを記す。

この茶室は、三畳台日本勝手席になっている。圓朝の茶道は表千家の不白系と思われ、三畳台目にしたのは、表千家の不審庵に倣ったのかもしれないが、写しではない。出炉とすると、京都市の南禅寺金地院八窓席に似た構造と言える。また、つくばいに屋根がめぐらされている点など、金沢市の兼六園成巽閣清香軒と酷似しているので、三畳台目向切炉だった可能性が高い（図12参照）。『郊外』所載の「圓朝の禅室」に紹介された圓通堂は、小泉策太郎が三畳向切の茶室に作り変えているが（図13）、亭主の左側に客が座る逆勝手になっている。これは新宿にあった茶室が一般的な出炉でなく、向切だった可能性を示唆しているのかもしれない。なお、新宿の住居には六畳の居間にも炉が切っており、これは内々で茶を喫するためのものかもしれないが、一般家庭で居間に炉を切るのは珍しく、かえって圓朝の茶道への傾倒がしのばれる。腰掛待合がないのは不可解だが、露地の造作なども茶事を考えたものと言ってよからう。



茶道口  
图13

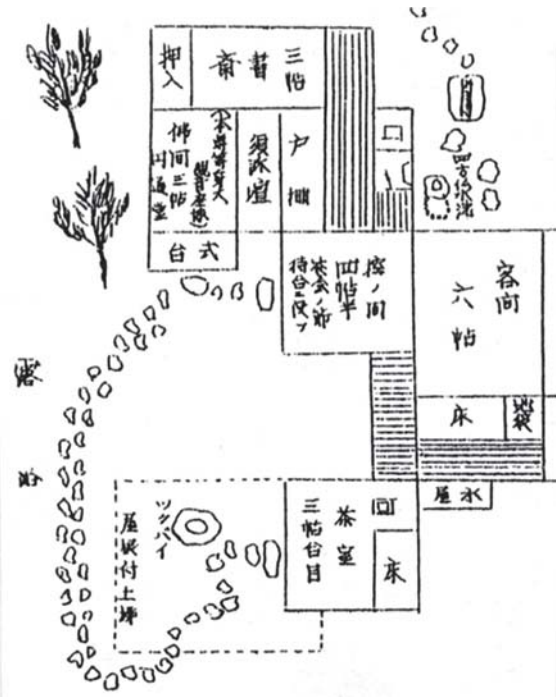
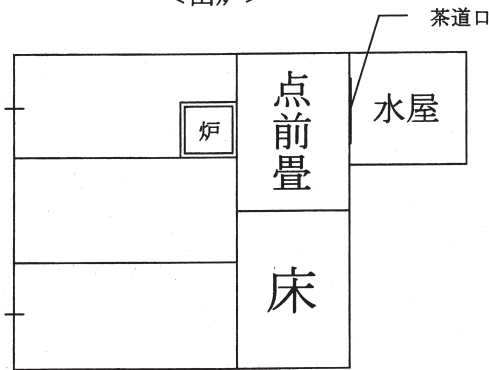


图11

円朝住居茶室想定図

<出炉>



<向切>

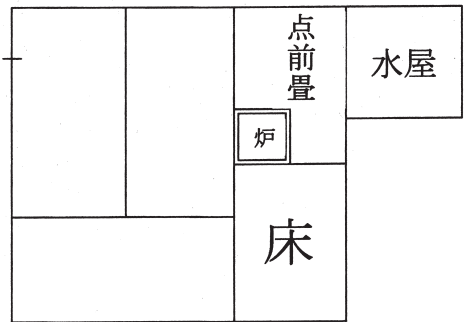


图12

圓朝の茶道について、永井啓夫氏は「茶道は表千家を学び、器物の鑑識にも造詣が深かった」とするばかりで、多くを述べていない。戸田勝久氏は、圓朝の茶道の師を表千家の式守不争と推定している。<sup>4</sup> 入門の時期は明らかでないが、戸田氏は圓朝が大西五郎左衛門作の広口釜に、「明治元年冬 木場鹿島清左衛門方より出」と箱書をしたことから、<sup>5</sup> そのころ既に茶道への十分な理解を持っていたと示唆している。また、『圓朝遺文』に、

其後本所二葉町（現在の墨田区石原・引用者注）へ普請をして移転したのであるが、此処はもと旗本の隠居の下屋敷を譲受けたので、地所も五百坪も附いてゐて其頃三百圓足らずであつたといふ。庭も広いから、北割下水から水を引いたり、池を作り橋を架け松林の中へ建物を立てたりなどした。

とあることから、早くに庭園や建物の趣味を含む茶の心得があつたと言う。更に、同じ本所元町（現在の墨田区両国）に式守不争が居たことも指摘している。圓朝が本所に住んだのは、明治九年秋と推定されている。<sup>6</sup> なお、不争は表千家不白流の川上宗寿の門人だが、宗寿の子宗順の門人に、圓朝の後援者でもあつた実業家馬越恭平（化生）がいる。<sup>7</sup>

ところで、圓通堂の仏間には、本尊として等身大の観音像が安置されていた。関山和夫氏はこの点に注目して、「寺院ならともかく、在家の仏間に立派な観音像をまつり、須弥壇までつけるというのは余程の篤信家でないといけないことである」と言う。そして、「私は圓朝と仏教とのつながりについて深い関心を持ち続けている。それは、私が以前『真景累ヶ淵』や『怪談牡丹燈籠』を読んだ時にそこに示されている仏教思想に強く心をひかれたからである。圓朝の幽霊談は広く世に知られているが、彼は幽霊の生成や消滅の原理を実に合理的に描いている。明らかに仏教の輪廻思想によるのだが、その扱い方が素人離れしているのに私は早くから気づいていた。むしろ大圓朝を作りあげたものは仏教だけではないが、圓朝の根本思想に仏教があつたことは確かである」と、圓通堂の存在と圓朝の創作のかかわりに言及している。

## 五 圓朝にとっての新宿

圓朝が新宿に住んだ明治二十年代、下町と新宿の往来は、藤浦富太郎の記憶によると、およそ次のようなルートを取っていた。

京橋の家から人力車で出かけ、鍛冶橋見付（と言っても当時は既に渡櫓は無く枳形だけ残っていた。）を這入り、東京府庁の前から馬場先見付（ここは渡櫓は無かったが、見付の門だけはあった）、それから二重橋を正面に見て堀端を左へ曲り、桜田門を抜けて、参謀本部、陸軍省、衛戍病院（現国立劇場敷地）の前を通って、半蔵門前を左折、麴町の大通りを真直ぐに、四谷見付の橋を渡り、そのまま直進して、大木戸に出る、ここで新宿御苑の通用門を左に見乍ら右へ曲って一丁程行つて、左側の細い横町を左へ折れると、確か二軒目に木造の簡素な潜り戸のある門が建っている。

こうして圓朝の住居に至る。下町から新宿までは一本道で、現在の道筋も変わらないが、天氣の良いときでも人力車で一時間以上を要したという。

圓朝は明治二十四年以降寄席を退隠しているが、それまでは寄席への出演を続けている。転居した直後と思われる明治二十一年十一月下席の顔付（新聞に掲載された出演者の一覧）によると、<sup>10</sup>芝区日蔭町の玉の井と日本橋区茅場町の宮松亭を掛け持ちしている。また、退隠の直前も、明治二十三年十一月上旬は日本橋区木原店の木原亭と京橋区南鍋町のつる仙、同下席は日本橋区米沢町の立花家と下谷区広小路の鈴木亭、十二月上旬は神田区猿楽町の無名亭と神田区和泉町の和泉亭に出演している。十二月下席は休んでいるが、二十四年一月上旬は日本橋区人形町の末広亭と本郷区東竹町の若竹亭を勤め、そして下席の麴町九段坂の富士本を最後に、圓朝の名は顔付けから消えている。

しかし、日本橋・京橋・下谷・神田など下町方面への毎日の出勤は、必ずしも容易でなかったと想像される。『圓朝遺文』にある、「新宿の住居も気に入らぬ事はなかつたが、終ひには『下町へ行きたいね』とよく云ひ／＼してゐた」という言葉が、圓朝のどのような気持ちによるものかはわからないが、寄席退隠の原因として通説になっている席亭の横暴に対する不満に加えて、遠距離の通勤も寄席への出演を消極的なものにしていたとは考えられないだろうか。

引退後の圓朝が再び寄席に出演するのは、「圓朝遺文」では明治三十年十一月のこととされているが、齋藤忠市郎氏の調査によると、明治二十五年に一時復帰している。<sup>11</sup>

本月一月は本郷の若竹へ掛りたるに去暮より感冒に罹り一日二日は圓遊が代りを勤めしかど一昨夜よりは圓朝子が出席になりしとかいふ（明治二十五年一月五日付やまと新聞）

圓朝子は一年振りの出席とは云ひながら初席の若竹も最初は感冒の為に欠席し九日より子が病氣全快の蒔きびらを為して出席ありしに平均三百五十人の入りなりしと（同一月十九日付やまと新聞）

出演したのが三日からと九日からと、記事に相違があるが、いずれにしても体調の良くないことがわかる。更に、齋藤氏は「とにかく病いの合い間に高座に上がったため、その無理がたたったのか、翌二月は休席し、三月上旬の浅草茶屋町酒恵亭では、圓朝出演の看板を出し、客を呼んだが、圓朝が出席しなかったため、お客三、四百人が看板を壊したりして大騒ぎになる一幕もあった。三月下席は日本橋薬師地内の宮松亭と芝日影町玉の井に出演しているが、健康が勝れないため、時折り高座に上がっていた。しかし高座復帰は余り気乗りがしなかつたらしく、四月からは全く姿を見せていない」と述べている。

また、圓朝は明治二十五年九月に大阪の浪花座へ出演している。<sup>12</sup>座主秋山儀四郎の強い要請によるものだったが、圓朝の大阪在住の門人二代目三遊亭圓馬宛の書簡には、「もはや老衰の身殊に劇場にては音声もとどかぬと申し辞退致候処」「演劇場興行は不勝手なり老声の通りかねると申せど」などであり、自身の体力の衰えから、広い劇場での口演に不安を覚えている。<sup>13</sup>

しかし、寄席以外の演芸会には出演を続けている。以下に明治二十四・二十五年の記録を上げる。<sup>14</sup>

明治二十四年十一月十五日、震災義援金募集の演芸会（友楽館） 演目「業平文治之伝」

同 十二月二十六日、日本演芸協会諸芸演習（帝国ホテル） 演目「新作初夢」

明治二十五年一月三十一日、慈善興行演芸（友楽館）

同 四月三日、八橋検校二百年祭神遊大演芸会（神田錦輝館）

次に、新宿へ転居した当時の圓朝作品の出版や上演の記録を上げる。<sup>15</sup>

明治二十一年十月、『売炭翁青馬牽綱』（『塩原多助』）上演（春木座）

明治二十二年三月、『花謡諷荻江一節』（『月謡荻江一節』）上演（同）

同 四月、『遅桜榛名梅香』（安中草三郎）上演（同）

『後開榛名梅香』口演速記（やまと新聞）

五月、『文七元結』『福祿寿』『熱海土産温泉利書』同（同）

六月、『文七元結』刊行

九月、『塩原多助経済鑑』上演（浪花座）

十月、『敵討札所の靈験』上演（吾妻座）

十一月、『粟田口霨一節裁』（粟田口霨笛竹）上演（春木座）

十二月、『霧隠伊香保湯煙』口演速記（やまと新聞）

明治二十三年六月、『塩原多助経済鑑』刊行

そして、明治二十五年の『塩原多助』『怪談牡丹燈籠』の歌舞伎座での上演や、『塩原多助』の修身の教科書への掲載が続いていく。

これらのことを考え合わせると、圓朝は新宿へ転居して以降、寄席の実情や体力の衰えから定席への出演に消極的になり、その一方で自身の作品の出版や上演が多くなるにつれて、創作を中心にした「書齋の人」へ生活のスタイルを変えていったのではないかと思われる。あるいは、新宿に住むことを選んだ時点で、そのような意識を持っていたのかもしれない。

## 六 圓通堂消失

最後に、残念な報告をしなければならない。本稿に圓通堂の現状を記そうと思ひ、金沢市歴史建造物整備課へ問い合わせたところ、旧江戸村を経営していた桜井家の菩提寺である康楽寺の建物が倒木のために半壊状態になり、平成二十年十一月初旬に棟続きの圓通堂

もともに解体されてしまったという。これで、新宿から麻布の柯蔭精舎、そして金沢と移転を繰り返しながら百二十年余にわたって存在した圓通堂は、永遠に姿を消してしまった。奇しくも、旧江戸村の施設を引き継いだ金沢市は、湯涌温泉に農家三棟・武士住宅一棟・商家二棟・宿場問屋一棟・武家門一棟の八棟を移築し、平成二十二年九月二十五日に金沢湯涌江戸村として開園した。私が圓通堂の解体を知ったのは、その八日前だった。

そもそも、私が北陸の金沢に圓通堂が現存することを知ったのは、平成十年五月五日のことで、それは東京在住の郷土史家窪田孝司氏からの電話によるものだった。<sup>16</sup> 話の内容と、翌日窪田氏経由で届いた『北国新聞』四月二十九日付の記事を要約すると、金沢市郊外の湯涌温泉にある江戸村に圓通堂が移築されているが、江戸村は経営難から閉鎖されてしまった。金沢市が再生事業のために土地と施設を取得したが、康楽寺とそれに付属する圓通堂は、宗教法人の關係で買い上げの対象から外れているということだった。桜井能唯氏が経営する江戸村は、藩政時代の建物を集めた文化財施設で、康楽寺も元々加賀藩の旧家の別邸だったものを移築して、それを桜井家の菩提寺にしている。圓通堂は、康楽寺の向かって左側に継ぎ足した格好で復元されていた。康楽寺も圓通堂も、江戸村の他の施設と並んで建っていたが、当時から一般には公開されていなかった。

ところが、江戸村は平成九年四月に閉鎖されてしまい、武家屋敷や商家・農家など十七棟と、道具類や展示品六百余点は、そのまま残された。荒廃が心配されるなか、平成十年三月に土地は金沢市土地開発公社が買い上げ、建物は金沢市へ寄付されて、その後は金沢市教育委員会文化財課が管理していた。

私は、平成十年七月七日に江戸村を訪ねた。市の職員に断って中へ入ると、見渡しのきく程度の敷地の周囲に建物が点在し、康楽寺と圓通堂もその一画を占めていた。圓通堂は周りをトタンに覆われて、いかにも無惨なありさまだったが、内側は白いつくいの壁で、意外に傷んではいなかった。脇の枝折戸から中庭へ回ると、トタンの覆いもなく、全体が見られるが、内部の状態は全くわからなかった。康楽寺と圓通堂は、同じ江戸村の中に置かれていながら、宗教法人の指定が解かれなかったことから、結局購入・保存の見通しが立たないままに十年余が経過してしまった。



## おわりに

私は、資料として圓通堂の記録を残すことと併せて、圓通堂の存在と意義が広く知られることによつて、保存が実現するための一助になるようにという思いで本稿を執筆した。しかし、圓通堂は既がない。期せずして、圓通堂の最期を報告することになってしまった。圓朝の人情咄を継承した六代目三遊亭圓生が昭和五十四年に、八代目林家正蔵（彦六）が同五十七年に没し、それからおよそ三十年がたつ。近年、桂歌丸・五街道雲助・林家正雀、更にはそれに続く中堅・若手の落語家が、『怪談牡丹燈籠』や『真景累ヶ淵』だけでなく、従来あまり演じられることのなかつた圓朝作品を積極的に取り上げている。圓朝物への関心はむしろ高くなっているのかもしれない。圓通堂が保存されて、それが圓朝復活の象徴的な存在になることを願っていたが、もはやそれはかなわない。しかし、圓朝から門人の三遊亭一朝を通じて圓生や正蔵に伝えられたものを受け継ぎながら、次の世代の落語家の新しい解釈によつて圓朝作品が再生していくことに希望を持ちたいと思う。

〔付記〕本稿は、日本近世文学会平成十三年度春季大会（於中央大学）で「三遊亭圓朝と圓通堂」と題して発表したものに基づいています。学会発表の折に御教示いただいた石塚修氏、宮本瑞夫氏、そして延広真治氏に御礼申し上げます。殊に、不案内な茶室については全面的に石塚氏のお世話になりました。圓通堂に関する資料は、すべて窪田孝司氏から提供されたものです。窪田氏の御好意に感謝するとともに、保存の実現にお力添えできなかったことを申し訳なく思っております。また、麻布から金沢への移転について御教示いただいた古池好氏、保存に向けて御尽力くださった岡部三郎氏と諸芸懇話会の皆様に御礼申し上げます。



平成10年当時の圓通堂

## 注

- 1 「圓朝住居茶室想定図」は、石塚修氏の作成したものに基づいている。
- 2 圓通堂の場合、点前畳の内、点前座の向こう側に炬が切つてある入炬で、更に亭主から見て客側にあたる左側に炬が切つてあるので逆勝手向切ということになる（飯島照仁「炬の切り方」『淡交』平成二十一年五月号）。
- 3 永井啓夫『新版三遊亭円朝』（青蛙房）平成十年
- 4 以下、「近代の芸文と茶の湯（三）三遊亭円朝」（『淡交』昭和五十六年三月号）による。
- 5 『三遊亭円朝全集』別巻（角川書店）昭和五十一年
- 6 注3に同じ。
- 7 大塚栄三『馬越恭平翁伝』（馬越恭平翁伝編纂会）昭和十年
- 8 「隨筆・落語史上の人びと（16）——三遊亭圓朝（2）——」（『落語界』第八卷第三号、昭和五十六年八月）。なお、『落語風俗帳』（白水社、昭和六十年）に同趣旨の記事がある。
- 9 藤浦富太郎「内藤新宿北裏町」（『圓朝考文集』第二（昭和四十五年六月）
- 10 六代目柳亭燕路「真景寄席年表」第七回（『落語界』第六卷第四号、昭和五十四年十一月）。なお、天保の改革以後大正時代の前半まで、寄席の興行は月の前半を上席後半を下席として、出演者が交代していた（山本進『図説落語の歴史』河出書房新社、平成十八年）。
- 11 齋藤忠市郎「落語史外伝——引退後の圓朝（1）——」（『落語界』第六卷第一号、昭和五十四年二月）。なお、「圓朝遺文」には「圓朝が席を引いたのは明治二十四年で、六月限り出なかつたといふ事である」とあるが、一月が正しい。
- 12 注11に同じ。
- 13 注3に同じ。そのため、劇場の天井に電線を張つて声の通りをよくしたと伝えられるが、実際に効果があつたのかどうかはわからない。
- 14 倉田喜弘編『明治の演芸』（五）国立劇場芸能調査室（昭和五十九年）
- 15 注3に同じ。『歌舞伎年表』第七卷（岩波書店、昭和三十七年）により一部訂正。
- 16 以下の経緯は、『文学』増刊「圓朝の世界」（岩波書店、平成十二年）に「円通堂今昔」として報告している。